

# 吉備と秦氏(2)

会員 山田良三

## 前号の吉備と秦氏(1)の続き

### 一、日本書紀の記述から

『日本書紀』 応神天皇二十二年条に、次のような記事が見える(以下の原文は岩波書店刊『日本書紀』による)。

「二十二年の春三月(中略)、天皇、難波に幸(いでま)して大隅宮に居します。(中略)高台(たかどの)に登りまして遠(はろか)に望(みそな)はす。時に、妃兄媛(えひめ)侍り。西を望(おせ)りて大きに歎く。兄媛は、吉備臣の祖御友別(みともわけ)の妹なり。(中略)天皇、兄媛が温情之情(おやおもふころ)篤きことを愛でて、則ち語りて日はく、『爾(いま)し二親を視ずして既に多(さは)に年を経たり。還りて定省(とぶら)はむと欲ふこと、理(ことわり)灼熱(いやちこ)なり。』とのたまふ。

則ち聴(ゆる)したまふ。よりて淡路の御原の海人(あま)八十人を喚して水手(かこ)として吉備に送す。(中略)天皇、便ち、淡路より転(めぐ)りて、吉備に幸して小豆嶋に遊びたまふ。

(中略)葉田(はだ)の〔葉田・此(これ)をば籬(はだ)と云ふ。〕葦守宮(あしもりのみや)に移り居します。時に、御友別参赴(まうけ)り。則ち、その兄弟子孫を以て膳夫(かしはで)として饗奉(みあえつかまつ)る。天皇、是に、御友別が謹惶(かしこま)り侍奉(つかえまつ)る状を看(みそな)はして悦びたまふ情有(なさ)します。因りて吉備国を割きて、その子等に封(ことよ)さす。(中略)ここを以て、その子孫、今に吉備国に在り。」

以上の要点は次のようなものである。

「応神天皇の妃兄媛は吉備出身であった。天皇が淀川べりの大隅宮に居た時、兄媛が故郷を懐かしく思い、吉備へ帰りたいと言うので許可した。ところが、天皇は兄媛が恋しくなって、吉備に出向き、葉田の葦守宮に逗留した。兄媛の兄

の御友別は一族を挙げて天皇を歓待し、帰順の意を表した。天皇は大いに悦び、吉備国を割いて、御友別の一族それぞれに領地を与えた。」

以上は有名な応神天皇が妃の兄媛を訪ねて吉備に来訪した記事である。この時代に吉備国を支配していたのが御友別であり、その中心地が葉田の葦守宮だとしている。

応神天皇はその治世の時代に秦氏の渡来を実現させた天皇であり、秦氏の氏神である宇佐を始めとする八幡宮に祭神として祀られているなど秦氏とは切っても切れない関係をもった天皇である。

郷土の歴史研究家の薬師寺慎一先生はその著作の中で造山古墳は応神天皇の陵ではないかとも比定している。

葉田は波陀とも表記され現在の秦(ハダ)に通ずる。京大の上田正昭教授によると、

「古語拾遺」(807年)に「秦の字を訓みてこれを波陀と謂う」とあり、また「新撰姓氏録」が「姓を波多と賜ひき」とあることから「秦」は「ハタ=ハダ」の当て字と見るのが妥当とある。

造山古墳が応神陵かということはさておいても、この時代、吉備が極めて強大な勢力を持っていたことは確かで、「ハダ」という地名にからも吉備と秦(ハダ)との関わりの大きさを想定することができる。

また、この日本書紀に記される葉田の葦守宮は、現在の岡山市足守であるとみなされているが備前の幡多であるとの説もあり、検証して見たいと思う。

### 二、吉備地方の地名・史跡に残る「秦」

備地方の各地には秦氏との関わりを伺わせる地名や史跡が数多く存在する。そのいくつかを紹介して行ってみよう。

## 1)備中の秦氏

### ○総社市秦(ハダ)とその周辺

吉備地方最古の寺院跡：秦廃寺がある。その礎石の大きさなどから飛鳥時代に創建された日本列島内でも最古の時代の寺院であったと考えられる。更に地域の福谷には鉄産の神を祭る姫社神社がある。ヒメコソは新羅の王子アメノヒボコの妻とされ、秦氏が鉄産の技術をもって渡来したと伝えられることと相まって、この地域の秦氏の関わりが注目される。

最近発見された一丁ぐろ古墳など4～6世紀にかけての遺跡が多く発見されている。他に総社市には服部の地名が残る。服部は秦氏による機織に因む地名と言われる。背後地に祀られる正木山の麻佐岐神社の岩座は秦氏のもつ信仰形態を思わされる。稲荷(伊奈利)は秦氏の氏神だが、巨石を神の憑代とした信仰を持っていた。(稲荷の本社には磐座信仰の対象となった巨岩がある)

### ○高松稲荷

イナリは秦氏の氏神、竜王山には吉備地方でも最大級の盤座がある。報恩大師が開祖とされている。その伝承には秦氏との関係をうかがわせる内容がある。

### ○古代祭祀と秦氏との係わり

弥生時代の盤座信仰や古代祭祀に秦氏のかかわりをうかがわせる内容がある。(佐藤光範氏の研究)総社市秦の正木山 稲荷山竜王山ほか

### ○鉄産や銅の加工技術などの遺跡

古代「伽耶」は鉄産の集積地だった。吉備の各地に残る鉄産の遺跡や地名に残る「カラ」や「カヤ」の地名との係わりも残っている。

陶器の製造地も同様である。古代鉄産の中心地だったのが半島の伽耶(カラ)、鉄産技

術はここからもたらされたと考えられる。吉備にはカヤやカラの地名が多い。半島南部に鉄産技術が伝来したのは南方からのルートの可能性が高い。国東半島からは紀元前8～10世紀の製鉄遺跡が発見されており、半島南部の製鉄は倭国の国東にあったとされる東表国から伝えられたとの説もある。(鹿島昇氏など)

### ○古代古墳の築造やその他の遺跡との係わり

秦氏が高度な土木技術を有していたことは広く知られているところである。造山古墳など巨大古墳の築造や湛井の堰などの建設には秦氏の持っていた土木技術によるものではと思わされる。

## 2)備前の秦氏

### ○岡山市幡多

岡山市中区の幡多地区及び近辺には秦氏に因む多くの遺跡や史跡が残っている。幡多郷は和名抄にある上道郡幡多郷であり幡多をハタと読み古くからの地名を伝えている。郷の一部沢田の裏山には金蔵山古墳がある。この古墳からは多くの鉄器が発掘され、その築造時期が半島からの渡来の時期とも一致してこの地域の秦人との関わりが想定できる。赤田に幡多廃寺跡がある。岡山県下一と言われる巨大な心礎がある。赤田の地名も興味深い。

東に進むと旧瀬戸町から岡山市の境を経て旧長船町福岡に至る地帯は、鉄産の中心地であり更に陶器の製造地が続く。福岡神社がある。福岡神社は児島の熊野神社とも関わりがあり、金属加工の集団との関わりがあるとされている。

津島の半田山は「和気絹」に「秦氏の何某山中に松数十本植えたり。よって秦山という」との記録がある。

「可知」旧上道郡可知郷は秦氏のうち勝部の遺跡と言われる。

「幡多二千年の歩み」(幡多学区連合町内会発行)など参考にさせていただきました。

### ○備前市香登

現在備前市の香登地区には秦氏との関わりを示す伝承や史跡が多く残されている。秦大兄(はたのおおえ)がこの地の人物であったとの古事が残る。秦大兄は山背大兄の後見人だった秦河勝が山背大兄が蘇我氏によって死に至らしめられた時に難を避けて坂越に逃れたとき、同様に香登の地に逃れて来たと言われている。

町内の大内神社の摂社に大酒神社あり。大酒神社は大避神社とも書かれる。京都の太秦近辺や赤穂の坂越近辺にも見られるが大避はダビデを表すとの説もある。かつては「かがつ」と言われた陶器の産地。背後の熊山は秦氏との係わりが指摘されている。

### ○熊山遺跡と秦氏との係わり

熊山遺跡には秦氏とのかかわりをうかがわせる遺跡が数多くある。猿田彦神社も秦氏とのかかわりを持つ。熊山と秦氏のかかわりについては岡野進氏の研究が詳しい。

### ○西大寺観音院

秦皆足が納めた観音像が基との伝承がある。皆足姫は周防の玖珂(現在の山口県東南部)から来たと言われるが、玖珂にも秦氏の記録が残っている。所在地の金岡の地名にも秦氏との関わりが伺われる。

### ○赤穂市坂越

兵庫県になるが赤穂市の坂越には秦川勝を祀る大避神社がある。妙見寺は秦氏の寺といわれ(妙見信仰は秦氏との関連で多く見受けられる)、またここには児島高德の墓がある。高德は三石の戦いの後この地にかくまわれ傷

を療養したとされる。近隣には秦氏を祀る神社(大避神社)が多い。赤穂を流れる千種川は砂鉄が多く取れたことから、鉄の産業に必要な砂鉄を求めて秦氏がこの地方に来たという説もある。

## 3)美作の秦氏

美作の各地にも秦氏に関する多くの史蹟や記録が残っている。

### ○久米郡美咲町錦織

秦氏による桑の栽培と養蚕、絹織物の生産地だった。近隣の久米南町は秦氏の出自と伝えられる法然上人の誕生地であり、鉄山地でもあった。孝子として秦豊永の記録が残っている。美咲町には本山寺に近く波多神社がある。両山寺は白山信仰の開祖と言われる秦氏の僧泰澄が開基とされる。那岐町の菩提寺は幼少の法然上人が修行したと伝えられるが秦氏の君と言われた母親の弟が住職だったと言われている。

## 4)児島の秦氏

### ○倉敷市児島 郷内(林ほか)近辺

熊野神社がある。役行者の弟子が訪れて熊野山を開く、現在は修験道の総本山五流尊流院と熊野神社が併存する。後鳥羽上皇の皇子が開祖となり、児島高德はこの地の出生と伝えられる。元は旧福岡村と言われ、福岡神社があり、陶器の産地でもあった。三角神獸鏡が発見され銅産の地の可能性が大きい。ハタと呼ばれた地域があった。

### ○由加(瑜伽)山

由加山も古来岩座信仰の地であり、稻荷を祀っている。また妙見山があり妙見宮を祀っている。本殿の背後地は岩座であり古来イナリを信仰してきたことが伝承などに見ることができる。熊野社を祀る福岡(児島)と一体でもあり秦氏の信仰地であったことはほぼ間

違わない。由加山は江戸時代讃岐の金比羅宮との両参りが盛んだったが讃岐及び金比羅も秦氏との関わりの強い所である。

私は澤田沙葉師とこの地を訪問したが、その時宮司に岩座を案内してもらった。澤田師は秦氏＝景教徒でありそれがまさにイナリ、伊奈利～奈の字はもともと木の下に示すと書く～→稲荷）であると言われていた。

### 三、秦氏と岡山の人物

#### 1) 秦姓の人物

岡山歴史人物事典には何名かの秦姓の人物が紹介されているがその中のうち主なものは次のふたりの人物です。

**秦大兄** 香登の人物 朱儒 白鳳時代の技能者 698年（文武2）4月香登臣を賜姓された（続日本紀）。このとき備前国の侏儒とある。

**秦豊永** 平安時代の孝子。若年から父母に孝養をつくし、父母の死後もよく父母の墳墓を守った。865年（貞観7）11月位を三階級特進され、課役を免除された（三代実録）。久米郡錦織（現美咲町）に錦織神社あり、秦氏と関係が深い。

#### 2) 秦氏及び秦氏とかかわりがあったとされる人物

**○和氣清麻呂** 熊山をめぐる秦氏との係わり 宇佐八幡神託事件と秦氏との関わり 宇佐、大隅に流されるがいずれも秦氏と関わりの深い地であった。

和氣清麻呂が大隅に流される途上300頭の猪がその身を守ったとされるが、この猪とは秦氏のことではないかと言われている。和氣氏を祀る神社に狛犬の代わりに猪が祀られている所以である。

平安京造営をめぐる秦氏との係わり、平安京は和氣清麻呂の進言と指揮の下、秦氏の協力で建設された。和氣清麻呂を祀る神護寺はもともと秦氏の修行地であった。

**○法然** 山田繁夫氏著「法然と秦氏」に詳しい

#### 二流れの幡

父漆間氏は辛島氏（宇佐神官家）の流れ（美作立石家と同族）である。辛島とは嶋（倭国、日本）における韓（秦）の意味である。

母秦氏の君は秦氏の長者の娘であった。法然が幼い頃修行した菩提寺は母秦氏君の弟が住職だった。久米南の地域と秦氏の係わり錦織神社と両山寺：錦織神社のある旧錦織村には秦氏の長者屋敷があったと伝えられる。また歴史人物にも記録のある秦豊永の伝承がこの村にある。また錦織神社とは両山寺とつながっているが両山寺の開基は白山権現の開祖秦氏の同属秦澄（たいちょう）である。

また法然上人の両親が子授けを祈願して参籠したと言われる本山寺近くには波多神社があり、金比羅山もあり、製鉄跡の存在など秦氏との関わりの大きい地域である。

#### ・熊野社と法然

法然の出家後実家の漆間家が熊野社に所領を捧げたという記録が残っている。

**遊学中の秦氏との係わり**＝法然の南都遊学時にこれを支援したのが洛西の秦氏であるのではと山田繁夫氏は推察している。

**・聖集団と法然**＝聖集団とは公的な寺院に属さない僧侶の集団である。これも秦氏と関わりが深いと見られている。

#### ○児島高德

誕生の地とされる児島熊野社、所在地とされる豊原郷、出兵の地熊山、傷の治癒のため滞在したとされ、高德を祀る碑も残る坂越等関係する各地は秦氏の伝承の色濃く

残る地域である。

### ○宇喜多一族 先祖は百済王家か 新羅王子天日矛か？

宇喜多の先祖は百済の王家とも新羅王子天之日矛とも言われる。いずれにしても半島からの渡来の末裔であるということである。

### ○宇喜多の別姓は「秦」

香川県観音寺市八幡町の四国霊場札所、神恵院（じんねいん）・観音寺（羽原恭道住職）に収蔵されている史料「弘化録」に宇喜多の別姓は「秦」との記述がある。（このことは先史古代研究会会長の丸谷憲二氏より）

### ○宇喜多騒動

キリシタンとの係わりが騒動のもとと言われている。香登地区には「鼻塚」という祠がある。これは秀家の旗持ちだった六助が戦勝の証として持ち帰った敵兵（朝鮮兵）の鼻を「敵兵といえども国のために殉じた人々ならば」との趣旨で秀家公から貰い受けた鼻を供養したのが始まりだと伝えられている。この香登地区は秦大兄の伝承があり、また江戸期は隠れキリシタンの伝承がある。

香登地区の歴史を研究した浜田先生に石に刻まれた十字架などの遺跡を見せていただいたことがある。秦氏が景教徒であったとすれば、その教えに近かったキリシタンにその多くが改宗していたことが頷けられる。宇喜多一族が秦氏であるか、そうでなくても秦氏と深い関わりがあったことは否定しがたい。

## 四、秦氏と吉備との関わりを考える

秦氏に関わる様々な伝承、その中でも吉備の国に残る伝承や遺跡を見ると。秦氏の渡来の主力地が吉備であったのではと思わされる。

薬師寺真一先生は波陀の葦守宮と応神天皇との関連から、造山古墳が応神天皇の陵ではないかという説を掲げられているが、応神天皇と秦氏との関わりを考えると十分考えられる説である。

最近岡将男さんが「吉備邪馬台国東遷説」という本を出版されたが、この中でも倭国の古代国家形成に吉備が深く関わっていた事実を克明に挙げておられる。

弓月の君が127 県の民を率いて玄界灘を渡って来た。それでは弓月の君はどこに上陸したのであろうか。赤穂の坂越であるとも言われている。坂越といえば秦氏の族長の秦川勝が蘇我氏の難を逃れて来た地だとされているが、香登に住んだと言われる秦大兄も同じ時に蘇我氏の難を逃れて香登に来たと香登の歴史研究家浜田先生から耳にした。

秦氏渡来の時代に倭国のなかで最も巨大な古墳である造山古墳が作られた事、吉備の各地に残る秦氏の遺跡の多さを考えるとここ吉備こそが秦氏渡来の中心地であったと考えるのが自然であろう。勿論山背や関東の秦野、信州、尾張、伊予や讃岐、周防など各地に秦氏の史跡や伝承が残っている。しかし吉備こそが秦氏渡来の中心地というのが私の率直な実感である。

先般発見された総社市秦の一丁ぐろ古墳、全長70メートルの前方後方墳である。造山古墳などの前方後円墳の造られる少し前の時代である。私も数度訪問させていただいたが、その時代からすれば極めて大きな古墳である。ここに登れば眼下に吉備の平原を見渡すことができる、さらに後方の背後地は正木山である。

池田家が備前に封じられて岡山藩主となって最も崇拜されたのが備前一宮石上布都魂神社（現赤磐市）である。この神社は素須佐男命が八岐大蛇を退治した剣が納められたとされ、石上の名のおり物部氏の神社である。

### <●考>

日本書紀一書に、「其の蛇を断りし劍をば、號けて蛇之鹿正(おろちのあらまさ)と曰ふ。此は今石上に在

す」また一書に「素盞鳴尊、蛇の韓鋤(からさひ)の劔を以て、頭を斬り腹を斬る、(中略)其の素盞鳴尊の、蛇を断りたまへる劔は、今吉備の神部の 許に在り。」

宮司の物部さんに聞くと、須佐男命の王子であるニギハヤヒ命は吉備から東方に向かい但馬方面を経由して大和に登ったとされる。

そう考えると古代の吉備は出雲から来た須佐男～ニギハヤヒの物部一族が支配していたとも考えられる。一方物部氏とその後対立した蘇我氏は応神天皇の母君である神功皇后に仕えた竹内宿禰の末裔とされる。蘇我物部両家は対立し戦ったようにも見られるが実は緊密な姻戚関係がうかがわれる。

吉備から播磨、摂津にかけて須佐男命を祀る神社が数多く見受けられる。この地域の支配者は物部一族であったと想像出来る。とすると吉備は物部と秦氏が連携して繁栄を築いた地ではないかと、私は考える。

須佐男命が八岐大蛇を切った劔はいくつかの呼び名があるがその一つがカラサビの劔である。カラとは韓のことである。当時、半島南部のカラ(加羅とも伽耶とも言われる)東アジアでも有名な鉄産の中心地であった。須佐男の一族とカラとの関係もうかがわれる。

カラというと辛とも書く。九州宇佐の八幡宮の神官家は辛島、宇佐、大神の三氏であった。

宇佐神宮は応神天皇と神功皇后と比売神を祀るが八幡がヤハタと読むように秦氏と密接な関係がある。九州鹿児島島の鹿児島神宮は本八幡と呼ばれるが、ここ薩摩、大隅も秦氏と密接な関係のある地である。

京都駅から見える五重塔は弘法大師の開いた東寺であるが、ここの鎮守は八幡様とお稲荷様である。弘法大師は讃岐の佐伯氏の出

自であるが、その師の勤操が秦氏の僧侶であったように秦氏と密接な関係を持っていた。讃岐も秦氏が数多く居住した地である。

吉備が渡来した秦氏を最も多く受け入れた地域の、一つであったことは間違いない。

白村江のあと築造されたと言われる。鬼ノ城の築城技術なども大変なものである。

その後の吉備諸国からは数多くの宗教的指導者を輩出している。法然上人の出自が秦氏であることは明らかであるが、その他の宗教人の輩出の背景にも秦氏の歴史が存在していることは想像に難くない。

先に挙げた澤田沙葉師は第八代目の唯一神道の継承者であり、キリスト教民主同盟の日本の代表を務めるカソリックの信者であると同時に日本のモスレム協会(イスラーム)の代表も勤められた、日本古来の古神道を極め、旧新約聖書に加えコーランも原文で読破された超宗派の宗教家であった。

この澤田師が岡山を来訪した時に高松稲荷と由加山に同行した。この時に秦氏と稲荷、それに弥勒信仰の伝来、吉備の中山の意義など話を伺った。この時に「稲荷は秦氏の氏神様」と聞いた一言が私が秦氏に深く関心を持つようになったきっかけである。

澤田師はその著『日本発イスラームが世界を救う』の中で「景教と稲荷、秦氏の奇(く)しびな関係」という項目で、秦氏と景教について書いている。景教というと佐伯好郎博士による研究が有名で、一般に景教はネストリウス派キリスト教と理解されているが、これには少し理解違いがあるという。

ニケアの宗教会議に敗北したネストリウスは、東方教会に逃れてくるが、この東方教会は単純に今のようなキリスト教ではなく、コーランの影響を強く受けた教団だった。

秦氏がその信仰として持ち込んだ景教が伊

奈利であり、同時にそれは仏教的には弥勒信仰として融合していったものであった。

日猶同祖やネストリウス派キリスト教という言葉を聞くと、どうしても今日のユダヤ人やイスラエまたキリスト教を想像してしまうが、源流としては同じだとしても、その形態、儀式、内容についてユダヤ教やキリスト教と違ってたと理解しないと、秦氏の宗教は解らない。

最澄、空海～法然をはじめとした鎌倉仏教など秦氏と日本の宗教理念の関連性が明確に見えてくるようにも思う。今後の検証のテーマである。

## おわりに

日本の宗教や殖産に深く係わり、日本の産業や精神文化に多大な影響を与えてきたのが秦氏である。我々の郷土吉備は秦氏とのかかわりが実に深いところである。数多くの著名な人士を輩出した吉備の風土の形成に秦氏が深く関わってきたことがわかる。

今日世界から日本の文化が注目され、とりわけ日本人のもつ道徳性や倫理性が高く評価されている。日本人の良き精神伝統の形成に、主要な役割を担った人達のうち、かなりの部分が秦氏によって、もたらされたと見るのが私の見方である。

もとより日本人は多様な文化と血筋を持った人々の集合体でもある。それらが「和の精神」でもって融合しながら、独特の日本文化を形成してきたのであろう。その中で最も大きな影響を及ぼしたのが、最大渡来人である秦氏であったことは、歴史が事実として証明している。

今日の世界はそれぞれの国が様々な問題を抱えながら、それでも未来に希望を持って、より平和で幸福な文化を持った世界を希求し

ている。そういう今後の世界の展望に日本人の果たす役割への期待が大きい。

日本という国家の草創期に「秦氏」という当時としては極めて多数の渡来氏族がやって来て、殖産技術や精神文化の向上において、新しい国家建設に寄与した貢献度は極めて大きかった。全国各地にその遺跡や記録が残っているが、我が郷土吉備国に残された史跡も数多くあり、その貢献の歴史を感じる事ができる。今は誰が秦氏の子孫か、一部の秦姓を名乗っている方々を除けば、解らなくなっている。しかし残された遺跡や記録の数々を見れば、間違いなく我々の先祖がその一族の一端であったことは間違いない。

我々はその先祖から受け継いだ良き伝統の文化を、これからは世界の為に役立てる時が来ていると考えることが、われわれの郷土や国の未来、我々自身の未来への希望に繋がって行くように思う。

**この文章は 2012 年 7 月 20 日に、岡山県立図書館で「秦氏と岡山の人物」(主催:岡山人物銘々伝を語る会)及び 2013 年 5 月 19 日に総社市秦の「秦歴史遺産保存協議会」の総会で講演した資料を加筆修正した。**